

サランの戦士~Little Hero Paradise~

Division E1:第2回ジャーナル

‘魔法の1800mmレンズ’

Written by 角南一辺



お知らせ :このページ (ジャーナル表紙)に入るイラストをイラスト投稿掲示板にて募集中。

サランの戦士~Little Hero Paradise~

●困ったさん増殖中

物陰に屯して遊ぶ子供達の団に、ひとりの男の子が駆け寄って行く。

「とりゃーっ!」

手にした玩具の刀で、ごちんと一撃。

「いって、なにすんだよ!」

「闇奉行に証拠はいらねえ!」

トンデモ時代劇のキメ台詞を吐きながら、彼、銅達彦は現れた時と同様、風のように去って行った。周囲から見れば、たわいもないチャンバラごっこ。誰も、気にも止めなかっただろう。当の子供達は暫くきょとんとしていたが、気を取りなおして遊び始め、しかし興を削がれたものか、やがて帰り支度を始めた。

「俺、なんでこんなのに夢中になってたのかな」

「どーしよ、算数の宿題手付かず!」

「え、あ、やっべ! わかんないとこは携帯で相談な! 緊急帰宅いそげいそげ!」

大慌てで散って行く彼らを見届け、

「よし、もう大丈夫」

達彦は安堵の表情で頷いた。

「でも、これ、思った以上に恥ずかしいですね……」

『白銀のサーベル』ボタンを遊びながら、苦笑する彼。突如町に現れた、悪の手先ブラックサンタ。彼のプレゼントによって汚染された子供達は、反抗的になったり、自堕落になってしまったり、問題行動を起こすようになるのだ。達彦はそんな子供達を見つける度に、浄化して回っている。しかし、プレゼントは日々ばら撒かれているものと見え、被害者は一向に減る気配がない。ダメ化した友達に影響されて、魔法にもかかってないのに見事なダメっぷりを発揮する子もちらほら見うけられ、このままでは悪夢のダメスパイラルに突入することは目に見えていた。

(やはり、もとを絶たなきゃ駄目、ってことですね)

そこは抜け目のない達彦のこと、彼の足は町の図書館へと向かっている。まずは事前調査から、という辺り、何事にも慎重な彼らしい。

●天文台の噂

館内に入った達彦は、香織の姿を見つけ、おまかせ、と声をかけた。

(おまかせですって? と、いうことは待ち合

わせなのね!? てことはデート? デートなの!? 達彦~、あんな子の何処がいいのよ~っ!)

山積みにしたお菓子の本に隠れ、様子を覗いているのは戸塚泉。彼女の名誉の為に言っておくが、こういう状態になっているのは偶然的積み重なりであって、決して故意ではない。好きなお菓子の本を見に来たら、あまり顔を合わせたくない香織が来たので隠れたのだがそこに達彦が……、とまあ、そんな具合。更に言えば、達彦が好きとか気になっているとか、香織が嫌いとか嫌いとかいうのではなく、単にパツと出がチャホヤされているので、気に入らないという。フクザツな乙女心というヤツだ。

達彦と香織が探し出した、天文台に関する情報は主に2つ。『ぼくらのレンズ、磨け磨け』。そう銘打たれた地方紙の記事は、新しく建設される天文台の、反射型望遠鏡の集光レンズを地域の子供達が磨くイベントがあった事を伝えていた。1800mmもある巨大レンズに群がる子供達の姿が、なんだか微笑ましい。子供達の、天文への興味と未来への希望を育てようとか何とか、そんな当時の偉い人のコメントも載っていた。

2m近いレンズのサイズは、現在においても、一般に開放されている望遠鏡の中ではかなり大型の部類に入る。集光レンズは大きいほど、明るくはっきりと対象物を捉えることができるから、この望遠鏡は、実はかなり優秀なシロモノという事になる。なのに全然評価されていないのは、このイベントのせいなのだ。当時の子供達が聞いたらさぞかしがっかりするだろうが……。精密さが何より要求されるレンズ。当然、後でプロが磨き直しているのだが、素人、それも子供が手を入れた、屑レンズ。欧州辺りの一流メーカー品が当然という研究者レベルでは、そういう評価になってしまうのだ。

もうひとつは、佐々木老人が彗星を発見したという記事。「子供達の心を刻んだ望遠鏡が、夢をひとつ見つけ出したのです」という氏の発言は、前記の事情を色濃く反映したものといえるだろう。

「町の天文台に関する資料を探しているんですが……」

自分達で探せるのはここまでと、2人は司書のお姉さんに相談したと、

サランの戦士~Little Hero Paradise~

「あら、あの『おばけ天文台』を調べてるの？
貴方達も、不思議なものでも見たのかな？」
冗談めかして言ったものだ。『それはどういう？』と食いついた達彦に、お姉さんタジタジ。彼女が言うには、あの天文台で不思議なものを見たと言っている子供が、昔はだいたい各学年、2, 3人はいただけそうなの。見たものはバラバラで、お菓子の宇宙船が飛んで来たという者もいれば、宇宙オバケの大軍が攻めて来たという者もあり、こっそり燃やした筈の赤点テストが宇宙を漂っていたと泣き出す子もいて。当然ながら、大人は『夢でも見たんだろう』と取り合わないし、友達には面白がられて、卒業するまでからかわれ続ける愛き目に合う。
「おいおい、あまり妙な話を吹き込むんじゃないぞ」

おじさん司書が笑っているところを見ると、代々続いて来た噂らしい。

(ああもう、もう少し大きな声で話してくれないと聞こえないっ！)

泉さん、耳をダンボにして奮闘中。出るタイミングは完全に逸してしまったし、かくなる上はこのまま聞きとってやろうという心意気だ。なんだか全身がムズムズするけど、そんなの気にしないで集中集中……

(ちょっと、何！？)

さすがに鬱陶しくなって視線を移した彼女、暫し硬直。ヘンテコな形をした小さなプラスチック人形達が、彼女の体をよじ登って机の上に集結していたのだ。周囲の人達はというと、こんな異常なものは見えない事にしたいらしい。色彩感覚を破壊されそうな、原色同士のカラーリング。人間の想像力の限界に挑戦して、最後にはどーでも良くなってしまったかのようなその姿。手に望遠鏡持った、頭に電球の付いた卵体型のヤツを先頭に、海賊っぽいのやら飛んでるのやら車っぽいのやら、果ては腹でイモ焼いてるやつまで……。これ、ロボダッチという過去、一世を風靡したプラモデルで、マニアには今でも人気の品だったりするのだが、平成生まれの泉さんが知る由もない。

卵がジェスチャーで指示を出すと、ロボダッチ軍団はさささと展開。望遠鏡を頻りに達彦達に向けているところを見ると、どうやら彼らを監視しているようだ。

(……達彦、ここでも妙な事に首を突っ込んで

いるのね。一言注意してやらなきゃ。でも、巻き込まれるのはゴメンだし)

うーん、と悩んでいた泉さん、自分の荷物がかももぞしているのので開けてみると、一心不乱に彼女のお手製お菓子を貪り食っている『食いしん坊ロボ』の姿が。異変に気づき、ゆっくりと仰ぎ見たロボ。その手からお菓子がぼろりと落ちて、乾いた音を立てた。

図書館に似つかわしくない騒音に達彦が振り向くと、そこには定規でベシベシ人形を張っ倒している泉さんと、惚れ惚れするような手際でそれをテリトリに掻き込んでいるアシスタントの姿があった。周りの人達は手にした本から一切視線を動かさず、意地でも無視する構え。間もなく、ロボダッチ軍団は玉砕壊滅。散乱するモゲた手足が如何にも無残だ。

はっ、と大きく息を吐いて、泉さんはがっくりと肩を落とす。

「どうするのよ、完璧に巻き込まれちゃったじゃないのよ〜。達彦〜、責任取ってもらいますからねっ！」

え、私ですか？ と困惑する達彦くん。

「あの方、図書館では静かにしてください……」

穏やかに注意する司書お姉さんの表情が、心なしか引き攣っていた。

●ブラックサンタの夢の国

鋼達彦が熟考の人なら、南かるまは実行の人である。ブラックサンタの噂を聞いて、「よし、なんでそんな事してんのか、俺が調べてやるよ」

と、準備万端、天文台に張り込んでいるという訳。最近では真面目にやっているが、若い頃は(って、今でも十分若いけど)随分とやんちゃもしたという彼だから、荒事ならお手の物だ。「あら、今日も来たの？ よっぽど星が好きなのねえ」

田中のおおさんはホクホク顔だが、佐々木老人はいつもと変わらずむっつりと、望遠鏡の調整など一通りすると、出て行ってしまう。どうやら、かるまが星目当てでないと思抜いているようだ。

(ごめんな爺さん。さて、出て来い出て来いブラックサンタ、俺にもPC-FXを恵んでおくれ〜)

不純な動機を覗かせつつ、張り込むこと3日。

サランの戦士~Little Hero Paradise~

遂に、ブラックサンタの姿を捉えることに成功した。が、達彦とのバトルで懲りたのか、多分気が付いているのに、完全無視である。

「あ、こら、悪者の癖になんだ！ いいから来いって！」

思わず手を伸ばして掴もうとしたのと同じ時。ぐわっしょん！ と音がして、天井からサンタが落ちて来た。

「ぐめう、忌々しい望遠鏡め！ だが、壊す訳にもいかんし……」

独り言のように呟くサンタ。きょろきょろと辺りを見まわし、かるま一人なのを確認すると、突然態度がデカくなった。

「このブラックサンタを呼び寄せるとは、実に全く、いい度胸ですねえ～」

髭の中に埋もれた口を、くわっと開いて威嚇する。

「いや、なんでそんな事してんのか、無理矢理にでも聞いちゃおうかな、なんて思って」

「ほ～ほ～ほ～、その無謀な勇気を評して、Bサンタ特性チョコレートをば……」

「バレンタインデーはバレンタイン司教でしょ？」

節操ないね。それって、一応サンタを名乗ってる者としてどうなの？」

呆れ気味に言ったのが、相当に勘に触ったらしい。

「シャラップ！ 全身ミンチにして、ミートパイにしてくれるわっ！」

轟然と襲いかかってくるサンタ。だが、かるまは慌てず騒がず。必中に寒いぞ5枚という必殺のカードは、既に彼の手の中に揃っていた。

「いけ、『必中ちよー寒いぞ』!!!」

対応する間とてありはしない。光の渦に飲み込まれたサンタは、全身霜だらけ、ツララまで垂らして凍りつき、かるまに襲いかかろうとしたままの姿で、ぼて、とその場に倒れてしまった。

「で、どうしてそんなことしてるのかな？」

「あうう、ううひゃいかき」

ガチガチと歯の根も合わない有様で、しかしサンタは大見得を切って見せた。聞き取り辛いのので要約すると、つまり、子供達に叶うか叶わないかわからない夢や希望を与えて苦しませる事をせず、目先の安易安楽を与えて幸せにするのが自分の使命。そして、小さな淀みは更なる淀みを招き、遂には大いなる停滞が生み出されるのだという。それを彼は、『永遠に変化し

ない理想の世界』と言った。

かるまは、溜息をひとつ。さて、こいつをどうするか……と思案していた時、凄まじい破砕音と共に、巨大な影が彼の頭上に降って来た。それがサンタの連れている巨大イタチだと判断する前に、彼は咄嗟にカバンで身を守っていた。衝撃に薙ぎ倒され、何度も天地が入れ替わる。ほんの、爪の切っ先が触れただけだと思うのに、彼のカバンはズズズに引き裂かれていた。恐ろしいまでの速度と力。巨大イタチは前回同様サンタを口で啜えると、疾風の如き神速で出入り口に突進。啜えたサンタが壁につかえて凄い音を立てるのもかまわず、力任せにぶち破って、何処かへと消えてしまった。サンタの絶叫が山の方に続いていたから、今日のプレゼント配布は諦めて逃げたのだろう。……多分、サンタの有様からして、暫く町は安心だ。

「かなり頭悪いな、あのイタチ」

服の埃を払いながら、呟くかるま。どうやらサンタを逃がさない為には、先にイタチをどうにかする必要があるようだ。

イタチが暴れまわった跡は、やはり全て消えていた。彼が佐々木老人に声をかけ、帰ろうとした時、老人は考え事をしていたようで、一拍間を置いてから、『氣をつけて帰りなさい』と彼を送り出した。

（……もしかして、見られてたかな？）

一瞬思ったが、

（だとしたら、あんなに落ちついてる訳もないか）

そう思いなおし、家路を急ぐかるまのだった。

その日以来、黒いサンタの噂は絶えている。達彦が町を巡って、発見する被害者の数もめっきり減った。だが、今度は、夜な夜な住宅街を疾走する、巨大な獣の噂が子供達の口にはのぼり始めた。

かるまや達彦が、その噂からブラックサンタの巨大イタチを連想するのに、さしたる時間はかからなかった。

<< 続く >>

●次回選択肢

ア：天文台にGO！

イ：もちろん獣退治でしょ

その他